

昭和16年2月1日 第3種郵便物認可  
平成18年7月1日発行（毎月一回一日発行）  
俳句雑誌 沖 第37巻第7号



俳句雑誌[おき]

7月号

沖 発行所

# 家族時間

能村 研三

## 渾身の握手

吉田明さんが亡くなった。吉田さんは晩年札幌に住み大学で教鞭をとりながら、「沖」の札幌支部を立ち上げて奥様の陽代さんと共に北海道の会員の句会指導に努められた。

吉田さんの思い出は古く、創刊間もない「沖」へ作品を投句されてきた時、誠実な人柄を表す実直な字で書かれていて、その葉書を見て先師登四郎も「字が」上手な人は俳句もうまいよ」と言ったことを思い出した。

吉田さんの誠実なお人柄から創刊間もない「沖」の編集や運営にもお力を貸していただいた。その頃は西船橋の印内にお住まいで、よくお宅に伺っては夜遅くまで「沖」の今後の運営に関しての熱い思いをお聞きした。そんな時も奥様の陽代さんが温かく迎えてくださり、まれに見る仲の良い理想の夫婦であると思った。私も結婚して三十年近くになろうとしているが、その仲人の労を吉田夫妻にお願いした。「頼まれ仲人」であったにもかかわらず、誠実にその任をお努めいただき、その後三人の子どもの成長についても心配されながら

見はるかす富士の裾廻すそわに茶の芽吹く

夏ともし家族時間は揃はずに

宮入や破調で終る祭笛

風湿りして吊床の綱を張る

腹立つることを宥めて青山椒

眼に入りて励みの汗は辛くなし

朴咲いて大窓枠の画室かな

夕立前尾燈がつなぐ湾岸路

監視カメラの捕ふ歌人の夏帽子

ひと昔の周期早まり水を打つ

常にお声をかけていただいた。吉田さんは、昨年の「沖」三十五年周年の折、「沖」の功労賞を受賞されることになり、ご夫妻お揃いで上京された。お体の調子が優れないことは聞いており、痩せ細ったお体にシヨックを受けたが、久しぶりにお会いできたことに感激した。吉田さん自身、この上京が最後になると覚悟されていたのか、短い時間に昔からの知己の一人一人と目を合わせながら渾身の力をこめた握手をされた。私も思わずこみ上げる涙を抑えるのが辛かったが、この日が吉田さんとの最後になってしまった。今年の沖賞には陽代さんも選ばれたが、この受賞をご自分のことのように喜ばれ電話をいただいた。残念なことに吉田さんは句集を編まれていないことである。それも吉田さんらしい生き方だったのかも知れない。

能村 研三



# 万緑裡

林 翔

## 梅雨の句

孫二人来宅

男にもゆたの黒髪夏来たる

雨粒が抽象画描く玻璃五月

鯉幟ひらら風速計くるる

そよ風が小悪魔めく夕若葉

走り梅雨から続いて本番の梅雨、余りにも雨天が多すぎる。梅雨どきの名句をすぐには思い出せないので

講談社の『日本大歳時記』を抜いてみた。「走り梅雨」の項にいきなり書架の書の一つ逆しま走り梅雨

という自分の句を見付けて驚く。書架に書を戻す時、つい一冊を逆さに入れてしまったというのも、この鬱陶しさのせいだろう。「梅雨」では

万華鏡めきて尾燈や梅雨の街

阿波野青畝

飯食ひに出づる茫々たる梅雨の中

石田 波郷

部屋ごとに静けさありて梅雨兆す

能村登四郎

梅雨夕焼世の隅家の隅に縫ふ

馬場移公子

等があり、「五月雨」の項には芭蕉や蕪村の名句がずらりと並んでいるが、現代俳人の句で私が好きなのはあひふれしさみだれ傘の重かりし

さみどりの球体無尽実梅落つ

ぼうたんは黙つて散りぬ人はいさ

緑雨なか梨は宝珠か豆粒か

をちかたの木の間にあかるし梅雨晴れむ

老夫婦且つ病夫婦万緑裡

万緑に埋もるる墓の幸思ふ

中村 汀女

である。私の若かりし日には『汀女句集』を愛読した時期があった。

梅雨入頃の南風が黒南風であり、梅雨明頃の南風が白南風であるが、

黒南風の切傷に沁む運河べり

秋元不死男

白南風や樽に奔めく鯉の尾

瀧 春一

「五月晴」は近頃誤用されてもいるが、正しくは陰曆五月頃の晴で、梅雨季なのに快晴を賜った喜びを詠むべきだろう。

うれしさや小草影もつ五月晴

正岡 子規

ああ、五月晴を賜りたいものだ。

林 翔



# 蒼茫集



元 素

大畑善昭

春 月

吉田陽代

鉄の爪来て蒲公英の野を掘れり  
揚雲雀入口出口野にはなく  
身体のまるごと元素逃水も  
破れ傘間伐の木は朽ちしまま  
金の山吹列島を北上す  
眠くなる馬上チャグチャグ馬コの娘

二千年

千田

敬

病床日記形見となりぬ花あかり  
夫との会話胸に生れて花の下  
春筍の精進の膳夫へかな  
春月や亡き夫いつも我とあり  
倒木を母の木とせり蔦若葉  
双手に朝日いただくかたち朴若葉

風の翼

森岡正作

つちふるや漢字に馴染み二千年  
差し潮の間に魂消てかぎろへり  
春ともし瞳はこころの深井とも  
若楓仰ぎゐる間の浮力かな  
とつおいつで虫枝の貝となる  
国生みの島々率る青葉潮

再びの花を潜りし北帰行  
若く甘き修司のマスク春愁  
五月来る荒ぶる風の翼して  
筆を擱く五月の闇の冗舌に  
嘶きを欲る麦秋の野の轍  
新緑の木洩れ日神の啓示とも

花は葉に 北川英子

病棟に夫置いてきし夜の桜  
春灯の吸ひ込みて閉づ手術室  
心搏に電池の力借るおぼろ  
花は葉に遅々とされども恢復期  
退院す花満天星の鈴音なか  
鶴神吉田明氏引くや番ひの一羽のみ攫ひ

燃ゆる水 河口仁志

つちふるや砂漠の地下に燃ゆる水  
蝌蚪に足出て水底を歩みをり  
夏蜜柑剥きつつ論す子に一語  
予後いつまで泰山木は花を挙ぐ  
ゆるやかに刻の流るる白牡丹  
あかときの水水平らかに花菖蒲

巻き戻す 辻 美奈子

巻き戻すきのふが遠し昼寝の子  
子も声を殺すことありあをあらし

蛇穴を出て生身とはしなやかな  
せいうちのからだ波打つ薄暑かな  
海豹の身にはつなつの傷あまた  
卯浪はるかに逆叉を飼ひ慣らし  
をどり場 秋葉雅治

黄金週間籠城めけるレシピかな  
長老の心慄たかぶる祭触れ  
ロッカーに祭着つるし出勤す  
唐招提寺しようだいの鷗尾浮彫りに新樹光  
函入りはふたへごろもの薄暑かな  
月山は風のをどり場さくらんぼ  
五 感 千田百里

臍より足鰭提げし男現る  
蝌蚪の尾の取れるは月夜かもしれぬ  
茅花流しや五感の退化しつつあり  
花は葉に文字を産みつぐ女偏  
春光掛井広通さんへのあまねし「孤島」より船出  
雷神を乗せむと海は雲を生む

# 潮鳴集



いつかの奇蹟 頓所友枝

春風を尖らせてゐる切通し  
主なき部屋の灯点し夏来る  
野方図の庭木もよけれ愛鳥日  
夕焼の弱気いろなる雨上り  
重すぎる「いつかの奇蹟」濃紫陽花

響き 坂 ようこ

若楓日輪堰をかがやかす  
堰音の統べる一郷幟立つ  
脚細きグラスの響き聖五月  
座席から役者とび出し夏来る  
地価すこし上り筍当り年

ネクタイ 掛井広通

スリッパの奥にビー玉夏隣  
ネクタイは彗星の尾よ夏はじめ  
恐竜を飼ふなら砂丘青嵐  
滴りや山の動脈瘤ひそか  
蜂が来るノートパソコン起動中

もう一度 谷口みちる

抱かれて甘茶を灌ぐ幼き手  
鳥雲に地球を覆ふ電波網  
滝壺の渦に吸はるる快樂ふと  
こはれさうな恋と同席ソーダ水  
もう一度叱つてほしい朴花忌



# 沖作品



## 能村研三選

茨城

内山 花葉

花冷えの息整ふる一の弓  
大地いま落花受けとむ掌  
歌垣の山の石より蝶生るる  
春愁や断食月の地の棗椰子  
流水を波の打ちくる端午かな  
たて書きの文字に重力落雲雀  
日に一回集めるポスト山桜  
行く春や口に転がす薄荷鉛  
色あはきエコーパーやみどりの日  
文字拾ふブロッケルーパー麦の秋  
つちふれり埤頭も赤い靴の碑も  
農鳥岳に鳥形現るる花あんず  
浮き雲に触れつ舍利殿葺替ふる  
女の背適ふ高さや梨花を摘む  
梨摘花生絹のやうな日暮来る

市川

代田 幸子

千葉

大沢美智子

東京

菊地光子

春潮や別れを刻む腕時計  
蜜蜂や人吸ひ込まる丸の内  
亀の目の真一文字や藤の房  
夕暮の母の呼ぶ声濃山吹  
苔の花岩に表裏のありにけり  
梨棚は仕事の高さ花満つる  
山吹の流れに浸る一枝かな  
八重桜空の青さが重すぎる  
春惜しむ車輪埋もれぬ浜走り  
朧夜の入江にかしぎ舟屋の灯  
花衣ともちがふ落慶の日の衣  
落花踏む金子家当主十五代  
夏きざす沓脱ぎ石の端座して  
葛餅やゆるゆるのぼる太鼓橋  
島裏は絶壁なせり焼さざえ

千葉

佐々木よし子

埼玉

服部 早苗

# 沖作品 15 句選評

\*

能村研三

花 冷 え の 息 整 ふ る 一 の 弓 内 山 花 葉

四月の東京句会の綾瀬吟行での作品。綾瀬公園の中に東京武道館という屋根や窓が菱形をあしらった建物があった。ちょうど館の裏手側を通りかかったとき、女子中学生が弓道場で試合をやっていた。上着は白木綿の襦袢形の筒袖に、馬上袴の弓道衣に身をつつみ、櫛をかけたいでたちは凛々しく見える。弓道は和弓を用いて矢を射つて的にあてる一連の所作を通して精神を鍛錬するもので、息を整えて矢を射る一瞬は見ているも気持がよい。下五の「一の弓」の幹旋により佳句となった。

たて書きの文字に重力落雲雀 代田 幸子

日本の伝統というか、やはり縦書きには縦書きの魅力がある。無理な表段組や改行での工夫も必要もなく、文字列も綺麗に揃う。俳句会でも、よく清記句稿が回ってきて、それをノートに書き移す時、横書きに書いている人を見かける。実は昔私自身もそれをしばらくやってきた。横書きにすることで、一句を別の見方が出来るという利点もあったが、ある時からびつたりと

それを止めた。やはり日本の言語の表現として漢字や平仮名を書き記す時は、字と字とのつながりを考えると縦書きでなくては絶対駄目だということに気付いたからだ。この句、その縦書きに重力を感じたというのもおもしろい感覚だ。

梨摘花生絹のやうな日暮来る 大沢美智子

私の住んでいる市川の北部の方には梨畑が多くある。桜より少し遅い時期に真っ白というより少し青白い花をつける。しばらくすると梨農家では家族総出で梨の摘花作業が行われる。作業は大変だそうで慣れないと挙げつばなしの両腕が痛くなり難行苦行だそうだ。その仕事は日暮れが来るまで続けられるが、梨花の白さに馴染んでしまうとまるで軽くて薄い紗にも似た生絹のような日暮れに感じた。

蜜蜂や人吸ひ込まる丸の内 菊地 光子

蜜蜂は昔から高貴な昆虫で、労働、秩序、富の象徴とされ、蟻と共に人間顔負けの営みを行ってきた。ビジネスマンの牙城である丸の内、丸ビルなど高層のビルに大手商社や一流企業の企業戦士たちがしごきを削る。朝の出勤風景はよくテレビなどにも映し出されるが、駅を降りた人々は、黙々とビルの中の自分のオフイスへと向かう。まるで蜜蜂の巣へ吸い込まれていくように見えたのだ。

梨棚は仕事の高さ花満つる 佐々木よし子

梨の棚は、作る農家の人の身長に合わせて設計されるそうだ。花の時期の受粉作業や袋掛けの作業、そして収穫の時など、ちよつと背伸びして手が届くくらいの所に棚があれば一番良いそうだ。私も実際梨畑に

人った経験があるが、背が高いと歩くにも少し苦勞する。この作者も実際に梨畑に入ったからこそ発見できたことなのである。中七の「仕事の高さ」という措辞が適確である。  
(以下略)